渋川教会に赴任して

1995.8/1　たびじ No.58　　小鮒　實牧師

今年の４月、北海道の函館千歳教会から渋川教会に赴任してまいりました小鮒と申します。前号の「たびじ」で前任者の生地牧師が「ホンネとタテマエ」ということを書いておられましたが、この原稿を書くにあたり、ホンネを書こうか、タテマエを書こうかと少し迷いました。そして、結局「ホンネ」を書くことに決めました。「教会はホンネが言えるところであるべきだ」との確信によるものです。教会は神様によって「裸にされている」ところ。神様の前にウソ、偽りは通じません。タテマエを語り、かっこいいことを書いても、いずれボロが出るとするならば、最初から「ホンネ」を語った方が良いと「決断」いたしました。

ところで、「ホンネ」と申しましても、特別なことを語ろうというのではありません。渋川教会に赴任しての率直な印象をお話しようというだけであります。私たち家族が渋川に来て最初に思ったことは、「この牧師館に本当に住めるのか」という印象でした。荷物が到着したのはいいけれど、牧師館はまだ片づけ中で、ゴミの山。住めるような状態ではありませんでした。部屋も薄暗く、あちこちが傷んでいて、窓もよく動かない。聞くところによると、この牧師館は一九一七年に建てられた建物を移築したものだそうですが、さすがに年季が入っていて、住む者を拒むような、そんな印象でした。渋川に来る前は新築の牧師館で快適な生活しておりましたから、これからこの牧師館で生活するのかと思うと気が重くなりました。しかし、教会の人たちのご奉仕により、いろいろ手を入れてくださり、今はなんとか生活出来るようになっております。

「住めば都」ということがよく言われますが、渋川での生活が「都」となり得るかどうか。それは勿論「私たちの心がけ次第」ということになるのでしょうが、生活の基盤である「牧師館」がある程度快適でなければ「都」は遠い存在になってしまいます。それ故、今でも時間がある時には、ペンキ塗りをしたり、カンナをかけたり、壊れている所を修理したり、いろいろやっております。確かに古い牧師館ですが、教会員はすばらしい方が多い。よく奉仕をして下さいますし、熱心に牧師家族を支えて下さっています。それが何よりもの救いです。感謝しています。

一年が過ぎました

1996.5/1　たびじ No.59　　小鮒　實牧師

渋川教会に赴任して一年が過ぎました。この一年間いろいろ考えさせられました。今までの教会とあまりにも違っていたからです。例えば、

①礼拝の司会者は男性だけ（女性の役員は行わない）。

②讃美歌は普通の速度の倍の長さで歌うこと（お年寄りが多いためか？）。

③使徒信条の５６６番は奏楽とは関係なく唱えること（年度途中から奏楽に合わせるように変更）。

④役員会では、信徒（役員）が持ち回りで司会をし、議事進行を行っていたこと（これは何年も前からそうだったということですが、教規第百一条「役員会の議長は、主任者た

る教会担任教師またはその代務者をもってあてる…」を示し、５月からは、牧師が議長として役員会の議事を進めている)。

⑤教会学校は「子どもの教会」と呼んでおり、教師はいないこと（正確に言えば、教師と呼ばれる人がいないこと)。子どもも何々先生とは呼ばない。当然「教師会」はなく、その代わりに「スタッフ」と呼ばれる人たちが「スタッフ会」を行う。勿論、教会学校校長はいないから、教会学校校長の任職式などは行なわれない（スタッフのリーダーはいるが)。

⑥婦人会には会長がいないこと。その代わりに「委員」と呼ばれる人たちが数名（三ー四名）いて、みんなで話し合って役割を分担している。良い面も沢山あるが、他の教会の人から「渋川教会の婦人会会長はどなたですか」と尋ねられた時は困ってしまった。

⑦教会附属の幼稚園は赴任当時１４名の園児。しかも学校法人ではないので補助金も少ない。このような状況で幼稚園をやっていけるのかどうか（経営の事だけでなく、幼児教育そのものが出来るのかということも含めて）とても悩みました（次年度は１９名の園児で出発出来そうなので感謝)。この他にも戸惑うことがいろいろありました。

「郷に入りては郷に従え」という言葉がありますが、ラインホールド・ニーバーの次のような祈りを今思い起こしています。「神よ、変えるべきものであることについて、それを変える勇気を私たちに与えてください。変えることの出来ないものについては、それを受け容れる冷静さを私たちに与えてください。そして、変えるべきものと変えることの出来ないものとを、識別する知恵を私たちに与えてください。」

量より質

1997.3/31　たびじ No.60　　小鮒　實牧師

教会では主日礼拝の充実ということがよく言われます。一昨年までは「礼拝出席３６名を達成します」という数値目標を掲げましたが、昨年からは挙げないことになりました。実際に３６名を超えるのは、特別礼拝の時だけですし（いつもは３０名前後)、また数値目標の根拠がどこにあるのかも不明だったからです。

近年、数値で物事を考える人が多くなって来ています。学校の成績も数値、会社の業績も数値（経済分野ではほとんどが数値)。確かに、数値はとても便利です。数値で表した方が明確ですし、物事を判断する便利な材料になるからです。しかし、数値で判断できないことも沢山あるのではないでしょうか。受洗して２０年、３０年という人が、必ずしも立派な信仰者だとは言い切れませんし、多額の献金をしている人が信仰的にもすばらしいとも限りません。

聖書には「貧しいやもめの献金」のお話があります。イエス様が賽銭箱に入れる人々の様子を見ておられた時です。金持ちはたくさん入れたが、一人の貧しいやもめは、レプトン銅貨二枚（百円～二百円）を入れた。その時、イエス様はこのように言われました。「この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである」（マルコ　１２：４１～４４)。

ここにも数値が出ていますが、イエス様は決して数値そのものを問題とはしておりません。イエス様が問題としているのは「量より質」ということです。

昔「質よりも量」と言われた時代もありました。「何でもいいから腹一杯食べたい」と思った人も大勢いました。しかし物質的に豊かになった今日、反対に「量より質」にこだわる人も多くなっています。二千年前、イエス様は既に「質の問題」を教えている訳ですが、これはとても大切な問題ではないでしょうか。

数値も量も確かに大切。しかし更に大切なのは、中身、内容、質の問題です。しかもこれは私たち自身の問題でもあります。私たちの「中身、質」はどうなっているでしょうか。聖書は「人は目に映ることを見るが、主(神)は心によって(人を)見る」と教えています（サムエル上１６：７）。

きのうも今日も、また永遠に

1997.11/1　たびじ No.61　　小鮒　實牧師

この世には、変わっていくべきものと変わってはならないものがあります。イエス・キリストは「きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です」。永遠に変わらないキリストを土台として建てられているのが教会です。勿論、どのような教会を造り上げていくかは問題ですが、「神が据えられた堅固な基礎は揺るがない」ことを覚えたいものです。時代は移り変わっても、教会の本質は変わらないのです。以下、教会とはどういうものか、教団の信仰告白から考えてみたいと思います。

①キリストの体なる教会

体は全体として一つです。キリストを教会の頭として、各部分が互いに配慮し合う姿、「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶ」姿こそ、教会の姿と言えましょう。

②恵みにより召された者の集い

教会は単なる人間の集まりではありません。恵みによって召された兄弟姉妹の集い（共同体）です。恵みが先行し、その恵みによって築き上げられるのが教会なのです。

③公の礼拝を守る

公の礼拝は兄弟姉妹がみんなで守る主日礼拝（聖日礼拝）です。礼拝は、教会が教会であり続けるための大切な生命線です。時代が移り変わっても守り続けて行くべきものです。

④福音を正しく宣べ伝える

イエス様は「神の国が近づいた」ことを福音とされましたが、その神の国はイエス様の十字架と復活によって具体的に私たちに示されました。私たちの罪が赦され（救い）、神の国がこの世にもたらされたことを正しく宣べ伝えて行きたいものです。

⑤バプテスマと主の晩餐との聖礼典を執り行う

イエス様を私たちの救い主（キリスト）と信じ、バプテスマを受けるとき、私たちは救われるのです。また、私たちは主の晩餐（聖餐式）を通し、十字架による救いの恵みを口で味わい、体で感じるのです。

⑥愛のわざに励みつつ、主の再び来りたまふを待ち望む

「私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである」。たとえ小さな愛の業でも、神様はそれを祝福して下さいます。主の再臨を待ち望みながら、愛のわざに励みたいものです。

若者を諭すのを控えてはならない

1998.5/1　たびじ No.62　　小鮒　實牧師

最近は、ナイフで人を刺すというような事件が多発しています。中学生が学校の先生をナイフで刺し殺した。学校に行きたくないから人を刺した。いじめられたので相手を刺した等々。理由はいろいろあるでしょう。自己防衛、ストレス、プレッシャー、また、学校の問題（教師や授業の問題、内申書や推薦入試制度の問題)、家庭の問題(親の過剰な期待、知的偏重教育)、社会の問題(バーチャル・リアリティー・ゲーム、大人の犯罪)、いろいろあると思います。しかし、なぜ「ナイフ」なのか。

学校では、ナイフを持ってこないように指導したり、持ち物検査をするとかしないとかで動揺しています。中央教育審議会(中教審)では「幼児期からの心の教育のあり方に関する小委員会」から、ナイフ事件をきっかけに様々な提案がなされています。特に「家庭への提言」では、子どもたちが「切れる」のは「きちんと叱られた経験を欠いているのも一因」と指摘し、善悪をわきまえさせる「しつけ」の重要性を訴えています。

「最近の親は子どもを甘やかし過ぎる」とよく言われます。私もその一人であり反省していますが、甘やかし過ぎるのは問題です。特に、幼児期、甘やかされて育った子どもは、大きくなってもその味が忘れられず、自分の好き勝手なことをする。したいことは人の迷惑も考えずしますし、したくないことは、いくらそれが良いことだと言われてもしない。勿論、すべての子がそうである訳ではありませんが、しかし、そういう傾向があるのもこれまた事実であります。

聖書には、次のような言葉があります。「若者を諭すのを控えてはならない。鞭打っても、死ぬことはない。鞭打てば、彼の魂を陰府から救うことになる」(箴言 23 章 13-14)。最近では「幼児虐待」とか「体罰」というようなことも問題になっており、「鞭で打つ」なんて言いますと、暴力を肯定しているようでいただけない、いくら「諭す」といっても暴力は行き過ぎ、そんなふうに思われる方もいるかも知れません。しかし、小さい時から「何が善であり、何が神に喜ばれることなのか」を教えることは大切であります。実際に鞭で打つかどうかは別としても（現代では無理でしょうが)、子どもを育てるうえでの大きな手がかりになる言葉とは言えないでしょうか。

生きる力を身に付ける

1998.10/11　たびじ No.63　　小鮒　實牧師

先日、文部省から中央教育審議会「幼児期からの心の教育の在り方について」答申というパンフレットが幼稚園に届きました。冒頭の挨拶に「過保護や過干渉、育児不安の広がりやしつけへの自信喪失など、今日の家庭における教育の問題は座視できない状況になっているため、家庭教育の在り方について多くの提言を行うこととした」とあります。そして、具体的に家庭、地域社会、学校等への提言を行っております。

ところで、今回の答申では「生きる力を身に付ける」という事が強調されております。「生きる力」とは、

●自分で課題を見付け、自ら学び、自ら考える力
●正義感や倫理観等の豊かな人間性
●健康や体力と説明されています。

更に、「生きる力」の核となる豊かな人間性とは、
●美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性
●正義感や公平さを重んじる心
●生命を大切にし、人権を尊重する心などの基本的な倫理観
●他人を思いやる心や社会貢献の精神
●自立心、自己抑制力、責任感
●他者との共生や異質なものへの寛容等であるとあります。

確かに、最近の子どもたちは「生きる力」が身に付いていないようにも思われます。自分から進んで物事に取り組む子どもが少ない。また、何がよいことで、何が悪いことなのかよく分からないという子どもたちも多い。体力が低下し、すぐ病気にかかったり、ケガをしたりする。それ故、家庭や地域社会、学校等で子どもたちに生きる力を身に付けさせようということですが（提言)、問題は、子どもたちを育てる大人たちではないでしょうか。

先程の答申の中には、いみじくも「子どもに伝えるべき価値に確信が持てず、しつけへの自信を失った我々大人社会」という言葉が出て来ます。しっかりとした価値観を持っていない親(大人)、自信のない親たち(大人)こそ、むしろ問題なのです。価値観が多様化している今日、「あれでもよい、これでもよい」という相対化も結構ですが、確固たる価値観を持ち、自分に自信を持つことも必要ではないでしょうか。提言も結構ですが、今こそ永遠に変わることのない価値観に立って、子どもたちに「生きる力」を与えてあげたいものです。「主の言葉は永遠に変わることがない」(１ペトロ　１：25)

権 利 と 責 任

1999.5/1　たびじ No.64　　小鮒　實牧師

最近、「権利を主張する人は多くなったが、義務や責任を果たす人は少なくなった」などと言われます。例えば、働きもしないで、生きるのは人間の権利なんだから食べさせろと言うような人。憲法にも「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」(25 条)とある。だから、食べさせろと言う。

確かに、基本的人権は大切であります。しかし、憲法が保障する自由や権利は「濫用してはならない」のであり、また基本的人権を主張するのであれば、当然義務や責任を果たさなければならないのではないでしょうか。憲法にも「国民は、これを濫用してはならないのであって、常に公共の福祉のためにこれを利用する責任を負う」とあります(12 条)。

働きもしないで食べさせろと言う人。確かに働きたくても働けない人もいます。病気の人。高齢者。また今は完全失業率４．４％、完全失業者２９８万人、有効求人倍率０．４９倍(１９９９年１月現在)。確かに働きたくても働けない人もいるのです。しかし、働けるのに、働かない人だっている。そういう人は、基本的人権を云々する資格があるのでしょうか。聖書にも「働きたくない者は、食べてはならない」とあります(２テサロニケ３：10)。

義務や責任を果たさないで、権利ばかりを主張するのは、どこかおかしいのではないでしょうか。シャトーブリアンという人は、こんな事を言っています。「**義務が権利を作り出すのであって、権利が義務を作り出すのではない**」。一人ひとりが義務や責任を果たし

ていく時、また正当な権利も主張することが出来るのではないでしょうか。
　イエス様は「自分の十字架を背負って、私に従いなさい」と繰り返し語っています（ルカ９：23、同 14：27、マタイ 10：38、同 16：24、マルコ８：34)。
「自分の十字架」とは、その人が負わなければならない重荷と言ってもいいかも知れませんが、もう少し積極的に「私たちが果たして行かなければならない義務や責任」と言い換えてもいいのではないでしょうか。神様の前に、それぞれが果たすべき義務や責任を果たしていく時、また神様からの豊かな恵みも与えられるのではないでしょうか。権利だけが全てではない。義務や責任もあることを覚えたいものです。

三浦綾子さんを偲んで

1999.12/19　たびじ No.65　　小鮒　實牧師

　去る１０月１２日午後５時３９分、三浦綾子さんは多臓器不全のため北海道旭川市の病院で召天されました（７７歳)。「私にはまだ死ぬという大切な仕事がある」と言っておられた三浦さん。立派に最後のお仕事をされました。ご苦労様でした。天国で安らかにお休み下さい。
　インターネットの三浦綾子関連サイトには、同氏(姉)のファンのお悔やみのメールが沢山寄せられました。外国からのメールもありました。
　三浦さんは、クリスチャン作家として、数多くの小説、随筆を書き、多くの人たちに愛と希望、また、生きる勇気と感動を与えました。否、今も与え続けております。
　三浦さんの本の中に出てくるお気に入りの言葉を書き記すページには多くの言葉が書き込まれています。そのいくつかを紹介してみます。
◆自分一人ぐらいと思ってはいけない。その一人ぐらいと思っている自分に、たくさんの人がかかわっている。(「氷点」より）
◆自分を偉いと思う人間に、偉い人はいない。(「塩狩峠」より）
◆人が一生を終えた後に残るのはその人が集めたものではなく、与えたものである。(「続氷点」より）
◆モッコは重いほうを持て。(「ナナカマドの街」より）
◆愛するということは許すことだよ。(「ひつじが丘」より）
◆人間は自分の短所によっても人を傷つけるけど、長所によっても人を絶望させるほど傷つけるもの…（「裁きの家」より）
◆難儀なことだからやってみる。楽なことなら誰でもやるさ。しかし難儀なことは、やる気のある者でなければやれない。(「泥流地帯」より)
◆人間恩返しをしたと思ったら、途端に恩を忘れたことになる。恩を返したと思うことが最大の忘恩だ。(「銃口」より）
◆人間は「何になるか」を考える前に、まず「どのように生きるべきか」を考えるべきではないだろうか。(「孤独のとなり」より）
◆ほんとうに人を愛するということは、その人が一人でいても、生きていけるようにしてあげること…（「道ありき」より）
◆家庭は愛を学ぶ学校である。(「あさっての風」より）
　その他沢山。聖書の言葉も多数。すばらしい言葉を沢山残して下さった三浦綾子さん、

本当にありがとうございました。（一ファンとして）

魔法の言葉

2000.7/3　たびじ No.66　　小鮒　實牧師

十数年前、「アメリカインディアンの教え」ー子どもたちはこうして生き方を学びますーという詩に出会いました。最近、これは「子は親の鏡」という詩であることを知らされました。当初の表現と多少異なりますが、紹介いたします。

子は親の鏡

けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる
とげとげした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる
不安な気持ちで育てると、子どもも不安になる
「かわいそうな子だ」と言って育てると、子どもは、みじめな気持ち　になる
子どもを馬鹿にすると、引っ込みじあんな子になる
親が他人を羨んでばかりいると、子どもも人を羨むようになる
叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思って　しまう
励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる
広い心で接すれば、キレる子にはならない
誉めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ
愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ
認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる
見つめてあげれば、子どもは、頑張り屋になる
分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ
親が正直であれば、子どもは、正直であることの大切さを知る
子どもに公平であれば、子どもは、正義感のある子に育つ
やさしく、思いやりをもって育てれば、子どもは、やさしい子に育つ
守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ
和気あいあいとした家庭で育てば、
　子どもは、この世の中はいいところだと思えるようになる

この詩は、子育てをしている親は勿論のこと、私たち人間関係においても、とても大切なことを教えているように思います。みんなが「この世の中はいいところだ」と思えるようになりたいものです。ご一読をお薦めします。

『子どもが育つ魔法の言葉』（ドロシー・ロー・ノルト、レイチャル・ハリス著　ＰＨＰ研究所）

生き甲斐を見出す

2001.2/10　たびじ No.67　　小鮒　實牧師

もしあなたが「あなたの生き甲斐は何ですか？どんな時に生き甲斐を感じますか？」と問われたら、何と答えるでしょう。今の時代、「生き甲斐なんて言われても分からない。別に生き甲斐なんて、どうでもいいんじゃないの」なんて答える人もいるかも知れません。

では、本当に生き甲斐なんてどうでもいいことなのでしょうか。確かに、生き甲斐なん

て人によって違うでしょうし、また、生き甲斐を感じるというのも、これは気持ちの問題でしょうから、理屈でどうのこうのと言えるような代物ではないのかも知れません。
　しかしながら、生き甲斐がある人とない人、違いがあるのも事実です。生き甲斐があるという人は、概して、生き生きとしている人が多い。それは、生き甲斐というものが「生きるはりあい。生きていてよかったと思えるようなこと」(広辞苑)だとすれば、当然ということになります。
　それでは、私たちはどんな時に生き甲斐を感じるのでしょうか。
　冬休みの期間、息子が郵便配達のアルバイトをしました。働いてお金を得る初めての経験。最初は大変だったようですが、次第に慣れ、ある時こんなことを言いました。郵便を配達していた時、受け取った人が一言「ありがとう」と言ってくれたというのです。そして、その一言がとてもうれしかったというのです。
　私たちも似たような経験はないでしょうか。人さまに親切にしてあげて「ありがとう」と言われた経験。そして、その時「うれしかった」というような経験。このような経験が、生き甲斐というものに繋がっていくとは言えないでしょうか。
　昔はよく「世のため人のため」ということを言いました。最近は死語のようになっているこの言葉ですが、でも、社会のため、人のためになるような、そういう生き方、歩みをしていく時、また生き甲斐というものも見出されていくのではないでしょうか。聖書にも「めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい」とあります（フィリピ２：４）。自分のことだけではなく、他者との関係を大切にしていくとき、そこに新たな生き甲斐というものが見出されて行くかも知れません。あなたの生き甲斐を見出すヒントにでもなればと思います。

見捨てない

2001.7/29　たびじ No.68　　小鮒　實牧師

　モーニング娘ならぬ「じゃがいも娘」の話。ファーマーさんの畑から「じゃがいも娘」は生まれました。彼女は「世界で一番おいしいお料理になるの」と張り切っていました。
　町一番のレストランにやってきた彼女は、一緒にカレーライスになろう、シチューになろう、サラダになろうなどと仲間の食材から誘われます。でもすべて断ります。彼女にはプライドがありました。じゃがいもだけを使った世界一の料理になる夢でした。ですから、「早くしないと大変なことになるぞ」と言われても耳を貸しません。
　しかし、ある日のこと「じゃがいも娘」の頭から緑の芽がニョキニョキ生えてきました。ピカピカのポットに写し出された自分の姿を見て、じゃがいも娘はとてもショックを受けます。もうどんな料理にも使ってもらえません。それからの彼女には災難が続きます。みんなから馬鹿にされ、けむたがれます。こんなことであれば「カレーライスになっておけばよかった。シチューやサラダだってすてきなお料理だったんだわ」と思いますが、もう手遅れ。彼女は冷たい北風におされながら畑の方へ転がって行きました。
　ところが、彼女をみつけたファーマーさん。彼女を温かく抱きかかえ、土のベットに寝かせてあげました。そして、暖かな春がやって来た時、じゃがいも娘の体から、芽が出て、葉が茂り、きれいな花が沢山咲きました。そして、シワシワのじゃがいも娘には沢山の子どもたちがくっついていたという絵本のお話です。

（「ファーマーさんはみすてない」
作・柳川茂　絵・河井ノア　いのちの　　ことば社フォレストブックス発行）
◆この絵本から教えられること。
①どんなにすばらしいものを持っていても、自分だけでは活かされない。（共に生きる（歩む）大切さ。協調性。（１コリント 12：26）
②うぬぼれからは良いものは生まれない。（思い上がりもほどほどに）
（ガラテヤ５：26）
③何事にも「時」があることを忘れないように。（コヘレト３：１以下）
④失敗しても、温かく迎えてくれるお方がおられる。神様は決して「見捨てない」。
（ルカ 15：11 以下）
皆様も是非一度この絵本をお読みください。きっといろいろなことを教えられると思いますよ。

戦争？報復？

2001.10/14　たびじ No.69　　小鮒　實牧師

先般、アメリカで同時多発テロ事件が起こりました。多くの方々が犠牲になり、被害も尋常ではありませんでした。この事件に巻き込まれた多くの方々のことを覚えると本当に心が痛みます。一日も早く悲しみが癒されるように祈らざるを得ません。

ところで、この事件が起こって間もなく、アメリカ大統領の口から信じられない恐ろしい言葉が発せられました。「２１世紀最初の戦争」とか「報復」という言葉であります。これだけ大きな被害を受けたのだから、これを戦争と受けとめる気持ちも分かります。また、無差別殺人のテロ行為に対して報復するという気持ちも分かります。しかしながら、一国の大統領が、そう簡単に「戦争」とか「報復」という言葉を語ってもいいものなのでしょうか。

アメリカと言えば、キリスト教の国というイメージもありますが（実は、多民族、多宗教の国)、この大統領の発言は、キリスト教の教えとは似ても似つかないものです。

この事件後すぐ、アメリカに留学している友人からＥメールをもらいました。彼の通っている大学のキャンパス内で、この事件の犠牲者を悼み、また遺族の方々の心の平安を祈る祈祷会が持たれたとのことです。そして、その祈祷会の席上、次のような聖書の言葉が読まれたとありました。
◆悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。（マタイ５：４）
◆しかし、私は言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなた方の天の父の子となるためである。（マタイ５：44 － 45）
◆もう一個所は、コリントの信徒への手紙二 12：８－ 10。
これが聖書の教えであり、キリスト教の教えであります。

無差別殺人であるテロ行為。如何に大義名分、主義主張があったとしても、これは決して認められませんし、犯罪者は処罰されなければならないでしょう。しかしながら、戦争や報復からは、何も良い結果は生まれません。やられたからやり返す。これでは悪循環。悲しむ人が増えるだけであります。

確かに、現実はそう甘くはないのかも知れません。が、人間には知恵があるはず。神様から豊かな知恵をいただき、良き解決の道が与えられるよう祈りたいものであります。

いろいろな人がいる

2002.7/1　たびじ No.70　　小鮒　實牧師

今年は FIFA ワールドカップの年。世界中からいろいろな人たちが日本にやって来ました。世界を身近に感じた人もいるでしょう。そして、単なる知識ではなく実感として、世界にはいろいろな国があり、自分たちとは違う人たちが大勢いるということを知ったのではないでしょうか。

インターネットを通して流れていたメールが一冊の本になりました。『世界がもし１００人の村だったら』という本です。(池田香代子再話、C.ダグラス・ラミス対訳　マガジンハウス)

この本には「世界には６３億人の人がいますが、もしもそれを１００人の村に縮めるとどうなるでしょう」と、次のようなことが書かれています。

「１００人のうち５２人が女性、４８人が男性」

「３０人が子どもで７０人が大人。そのうち７人がお年寄り」

「６１人がアジア人、１３人がアフリカ人、１３人が南北アメリカ人、１２人がヨーロッパ人。あとは南太平洋地域の人たち」。

また「３３人がキリスト教、１９人がイスラム教、１３人がヒンドゥー教、６人が仏教、５人は…、２４人はその他の宗教を信じているか、あるいは何も信じていません」

「１７人は中国語をしゃべり、９人は英語、８人はヒンドゥー語とウルドゥー語、６人はスペイン語、６人はロシア語、４人はアラビア語。これでようやく半分。あとの半分は…」

そして、こんな言葉も出てきます。「いろいろな人がいるこの村では、あなたと違う人を理解すること、相手をあるがままに受け入れること、そして何よりそういうことを知ることがとても大切です。」

あなたと違う人を理解する。これはとても難しいことです。相手をあるがままに受け入れること。これはもっと難しい。しかし、お互いに相手を理解し、受け入れるとき、本当の平和への道が開けていくのではないでしょうか。

世界中の人が平和を望んでいます。みんな幸せになりたいと願っています。このような私たちの願いを実現させるためには、「世界にはいろいろな人がいる」という現実認識から出発すべきではないでしょうか。

聖書は「めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい」(フィリピ２：４)。また「互いに平和に過ごしなさい」と勧めています（１テサロニケ５：１３)。

◆『世界がもし１００人の村だったら』という、この本のオリジナルは、ドネラ・メドウズ氏の新聞エッセイ「ザ・グローバル・シチズン　村の現状報告」だそうです。原文のエッセイでは「もし世界が 1000 人の村だとしたら」という一行から始まっています。

いつも喜んでいなさい

アメリカで起こった一連の一般人連続射殺事件、バリ島のディスコ爆破テロ、モスクワの劇場占拠事件、日本での政治家刺殺事件等々、次々と起こる恐ろしい事件。また、日本の経済の低迷化、景気の悪化のために、私たちの顔はひきつり、暗くなって行きます。

聖書は「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。」(１テサロニケ５：16-18）と勧めております。が、現実生活を顧みるとき、必ずしもそうしてはいられないこともあります。

「いつも喜んでいなさい」とありましても、私たちはいつも喜んでばかりはいられません。私たちの現実生活、悲しいことやつらいこと、大変なことがいっぱいあるからです。

それでは、いつも喜んでいるためにはどうしたらよいのでしょうか。聖書は、神様の恵みを数え、イエス・キリストの十字架と復活による罪の赦しを覚え、信仰的な喜びに満たされることを勧めていますが、理屈だけで喜びが与えられる訳ではありません。

そこで、無理にでも喜びを作り出す方法を一つ紹介します。笑顔をつくる方法です。

インターネットに、「笑顔を作り出す練習」というものが載っておりました。用意するものは「鏡」一つです。先ず、鏡の前で、

①身体をリラックスさせます。（肩の力を抜いて）。
②静かに目をつむります。
③しばらく呼吸を整えます。
④嬉しいこと、楽しいことを思い起こします。
⑤うれしさ、楽しさを表情に出します。
⑥静かに目を開けてみると、鏡の中の顔が一番良い笑顔です。
⑦よし、この顔で行こう！と鏡の中の笑顔に語りかけます。

このようにして、笑顔の練習をし、笑顔を習慣づけることによって、生活が楽しくなるというのです。

笑顔でいるからと言って、本当にその人が喜んでいるかどうか、それは分かりません。しかしながら、お互いが笑顔で接する時、そこから「喜び」が生まれてくることもあるのではないでしょうか。

何もしないで、苦虫をかみつぶしたような顔をしているよりは、よっぽどいいのではないでしょうか。あなたも是非「笑顔の練習」をしてみませんか。

今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる。（ルカ６：21）

ホームページ奮闘記

2003.1/19　たびじ No.71　　小鮒　實牧師

２００１年２月１４日、渋川教会と信愛幼稚園のホームページを公開しました。役員会、教会総会で承認された公式のホームページです。

以来、更新し続けて（更新情報参照)、現在は１３０ページを超える膨大なものになりました（幼稚園のお誕生会のページだけでも、目次を含めると１６ページ)。プロバイダから与えられた１５ＭＢはとうの昔に使い切り、現在は古いページを個人契約のページに移し替えながら作成しています。

なぜ古いページまで取っておくかと言いますと、幼稚園の子どもたちの成長ぶり（３年間の変化、成長）を見てもらいたいと思っているからです（アルバムのようなもの)。

まだ、公開して２年も経ちませんが、アクセス・カウンタを見ますと、８０００を越えていますので、それなりの方々が見てくださっているようです。渋川教会のホームページにはアクセス・カウンタが付いていませんので、直接渋川教会のページを見てくださる方

を含めると、もっと多いかも知れません（諸教会・教団関係のホームページには、直接渋川教会のホームページにリンクを貼ってもらっているので）。

ホームページを公開しているからと言っても、まだそれ程大きな効果が現れているとは認められません。幼稚園の園児が急増した訳ではありませんし、ホームページを見て教会に来る人が急増したという訳ではありません。勿論、幼稚園の保護者の方々（両親だけではなく祖父母の方々）は、よくホームページを見てくださっているようですし、教会にも、ホームページを見て来られたという方々が何人かおられます（旅行者、ゴスペル参加者など）。しかしながら、ホームページのおかげで教勢が上がっているとか、入園者が増えたという訳では決してないのです。

そんなことを愚痴りながら、ホームページを作成していると、息子があっさり「やめたら？」と言いました。人の気持ちも知らないで、あっさり「やめたら？」はないでしょうと思いながらも、少しは気が動きました。でも、「ここであきらめたらあかん」と気を取り直し、「涙と共に種を蒔く人は、喜びの歌と共に刈り入れる」（詩篇１２６：５）と口ずさみながら、再びホームページの作成（更新）に取り組むのでした。

出張聖餐式はじめます

2003.6/29　たびじ No.72　　小鮒　實牧師

２００３年度の渋川教会の標語は「互いに愛し合いましょう」です。イエス様は「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」（ヨハネ 13：34）と教えられました。

最近、ご高齢のために、あるいは病気のために礼拝に出席できない方々が増えて来ております。元気なときには礼拝に出席できても、年をとったり病気になると礼拝に出席できなくなる。由って、聖餐にもあずかれない。また、主にある兄弟姉妹の交わりも疎遠になってくる。

これでは上記のイエス様の教えに反するということで、今年度から、特にこのような方々のところへ訪問し交わりを深めるとともに「出張聖餐式」を行うことになりました。

聖餐式は、私たちの身代わりとして十字架の道を歩まれた主イエス・キリストのことを思い起こし、私たちの罪が贖われたことを感謝し、救いの恵みを確認するひとときであります。また同時に、同じ主にある兄弟姉妹として「聖徒の交わり」を覚えるひとときでもあります。

訪問・出張聖餐式を通して、主の恵みを共に分かち合い、主にある兄弟姉妹の交わり（聖徒の交わり）深めてまいりたいと願っております。

それでは、訪問・出張聖餐式を具体的にどのように進めて行くのか。お申し出があれば一番良いのですが、必ずしも申し出があるとは限りません。そこで、申し出がなくても「訪問した方がよい」という方々を挙げていただく「世話人」という係を、伝道部の中に置くことを決めました。

世話人は、①訪問先との連絡・調整をしていただく（高齢になりますと、体調の良い日悪い日、また時間帯などもあり、細かい配慮が必要。病者も全く同じ）。②牧師と同行する人を募集し調整していただく（牧師だけではなく、必ず教会員が同行することにより、主にある兄弟姉妹の交わりを深めていく）等のご奉仕をしてくださいます。

遠慮せずに世話人までご相談ください。なお、今年度の世話人は中澤真理兄と金井たみ姉です。よろしくお願いします。
（６月 12 日、花の日訪問を兼ね、宮崎種司・トリ夫妻、富沢一男・裕子夫妻を訪ね、今年度最初の出張聖餐式を守りました。）

焦点が合わないと

2004.2/17　たびじ No.73　　小鮒　實牧師

「ジャー」「ゴシ、ゴシ、キュ、キュ」「スー」「ピー」「パチン」「チク、スー、サッサッ、ブツリ」。さて、これは何でしょう。実は、これは私が体験した白内障の手術の様子です。麻酔をかけた眼球、目の周りにも局部麻酔をして手術。消毒液を目に注ぎ（ジャー）、眼球をよく洗う（ゴシ、ゴシ、キュ、キュ）。そして眼球にメスを入れる（スー）。濁っている水晶体を超音波で砕いて（ピー）取り出す。そして人工のレンズを挿入（パチン）。それから縫合（チク、スー）、縫い合わせて（サッサッ、ブツリ）お仕舞い。

去る 10 月 16 日と 23 日、私は「老人性白内障」の手術を受けました（両眼）。老人性という言葉にショックを受けながらの手術でした。手術時間はおよそ 15 分。簡単な手術と言われていますが、受ける本人にとっては大変。とにかく、無事手術も終わり、今は目の感染、炎症を防ぐ目薬を点眼しながら静養中です。あまり無理をしてはいけないとのことですが、でも、仕事が…。

白内障の手術をすると「世の中が明るくなる」と言われています。確かに、明るくなりました。濁った水晶体の代わりにきれいなレンズを入れたのですから、明るくなるのは当たり前。

でも、問題は、単に明るくなるということではありません。よく見えるかどうかということです。実は、焦点（ピント）が合わないと結局よく見えないのです。私の場合、乱視がかなりきつく出て、眼鏡（メガネ）をかけないとモノが何重にも見え、結局よく見えないという状態。

イエス様は、頑固なファリサイ派の人たちに「あなた方が『見える』と言い張るところに、あなた方の罪がある」（ヨハネ９：41、口語訳）と言われました。

世の中が明るくなり、ただモノを見ているだけでは本当に物事を見ていることにはならない。焦点（ピント）を合わせて、真実を見ることが大切です。聖書は「何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれることであるかをわきまえるようになりなさい」と教えています（ローマ 12：２）。焦点（ピント）が合わないと、見えるものも見えない。イエス様という眼鏡（メガネ）をかけ、真実を見抜く目を持ちたいものであります。
（03・11 月記す）